

平成23年度 全国学力・学習状況調査希望利用採点集計補助事業 集計結果の概要について

教 学 指 導 課

I 調査の概要

1 調査目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。また、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査結果について

本年度の調査結果は、県の実施した「平成23年度全国学力・学習状況調査希望利用採点・集計補助事業」に参加した学校（以下「参加校」という。）の集計値（以下「長野県(参加校)」という。）である。なお、参加校の学校規模を考慮した無作為抽出ではないことに留意する必要がある。また、県の指定業者が算出した集計値（以下「全集計」という。）（県内外の参加、小、中学校の児童、生徒それぞれ13万人程度）についても同様である。

3 実施日 平成23年9月27日（火）～10月7日（金）

※文化祭等の関係で9月27日に実施できない学校もあったが、各校において厳正な環境の下調査を実施した。

4 対象学年 小学校第6学年 中学校第3学年

5 本事業への参加状況（希望利用採点・集計補助事業への参加校）

※31の市町村（組合）が参加

	参加校数	児童生徒数
公立小学校	98校(25.7%)	5,543人(26.5%)
公立中学校	45校(24.1%)	4,615人(22.3%)

<参考：全集計における児童生徒数>

	国語A	国語B	算数・数学A	算数・数学B
小学校	126,662人	130,718人	126,662人	130,728人
中学校	118,939人	122,744人	118,944人	122,709人

6 実施教科 国語、算数・数学

7 調査内容

(1) 児童生徒の学力に関する調査

① 「知識」に関する問題

身に付けておかなければ後の学習内容に影響を及ぼす内容 等

② 主として「活用」に関する問題

知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 等

(2) 生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査

① 児童生徒に対する調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

② 学校に対する調査

指導方法に関する取組や人的・物的な教育条件の整備の状況

Ⅱ 調査結果

1 教科に関する調査

(1) 結果の概要

- 「主として知識に関する問題」(A問題)、「主として活用に関する問題」(B問題)における平均正答率は、小学校、中学校の全ての調査で全集計を上回った。特に、小学校では国語A、中学校では数学Aが他の調査と比べて全集計との差が大きかった。
- 「正答数の分布状況」は全集計とほぼ同じ傾向であった。小学校、中学校ともに国語Aにおける上位層の児童生徒の割合が全集計と比べて高かった。
- B問題の平均正答率は小学校で4～5割、中学校で5～6割にとどまった。思考力・判断力・表現力といった、知識を「活用」する力を高める指導を一層充実させていく必要がある。

各調査の平均正答率(%)

	教科	長野県(参加校)	全集計	差
小学校	国語A	80.7	77.3	3.4
	国語B	43.6	41.4	2.2
	算数A	82.3	81.1	1.2
	算数B	47.3	45.0	2.3
中学校	国語A	82.1	79.7	2.4
	国語B	65.1	64.5	0.6
	数学A	61.5	58.6	2.9
	数学B	53.4	51.3	2.1

【参考】平成22年度調査

	教科	長野県	全国	差
小学校	国語A	83.4～84.9 <12.6/15>	83.2～83.5 <12.5/15>	有意な差はない <+0.1/15>
	国語B	77.7～79.5 <7.9/10>	77.7～78.0 <7.8/10>	有意な差はない <+0.1/10>
	算数A	72.9～75.0 <14.1/19>	74.0～74.4 <14.1/19>	有意な差はない <0/19>
	算数B	47.6～49.4 <5.8/12>	49.1～49.5 <5.9/12>	有意な差はない <-0.1/12>
中学校	国語A	73.6～75.2 <26.0/35>	75.0～75.2 <26.3/35>	有意な差はない <-0.3/35>
	国語B	62.6～65.0 <6.4/10>	65.1～65.5 <6.5/10>	下回る <-0.1/10>
	数学A	61.1～64.1 <22.5/36>	64.4～64.8 <23.3/36>	下回る <-0.8/36>
	数学B	39.7～42.8 <5.8/14>	43.1～43.5 <6.1/14>	下回る <-0.3/14>

上段：平均正答率の95%信頼区間(%)

※95%の確率で、全員を対象とした調査(悉皆調査)の場合の平均正答率が含まれる範囲

下段：<平均正答数の推計値(問)/設問数(問)>

(2) 教科の状況 ()内は問題番号、正答率、〈全集計との差〉

＜小学校国語＞

- ① A問題の平均正答率は 80.7%で、漢字の読み書きや、詩の情景について叙述を基に想像しながら読むことなど、相当数の児童ができています。一方、次のような問題の正答率が4割台であった。

書くこと・言語事項 主語を置き換えて記事の下書きを書き直す (5) 45.1%<+5.3pt>

- ② B問題の平均正答率は 43.6%で、提案に対する相手の意見を取り入れて、自分の考えについての理由を書くことが、全集計を大きく上回った。一方、次のような問題の正答率が2割台であった。

書くこと・言語事項 提案に対する相手の意見を取り下げて、自分の考えと理由を書く (2) 29.4%<+3.9pt>

読むこと 二つの伝記を比べて読み、登場人物の心情を表している言葉や文を抜き出して書く (3) 23.6%<+1.0pt>

このように、小学校国語では、表現の効果を考えて書き換えることや、自分の考えと相手の考えを比較し、自分の考えを理由を明確にして書くこと、資料を比べて読み、優れた叙述を多面的に捉えることなどに課題が見られる。

(参考：昨年度の課題)

「小学校国語では、様々な情報を基に、条件に合わせて自分の考えを書くことにやや課題が見られる。」

＜小学校算数＞

- ① A問題の平均正答率は 82.3%で、四則計算や、直方体の面の形や大きさについての理解、ひし形の定義や性質についての理解など、相当数の児童ができています。一方、次のような問題の正答率が全集計を大きく下回ったり、5割台だったりした。

量と測定 底辺 7 cm、高さ 3 cm、斜辺 4 cm の平行四辺形の面積を求める式と答えを書く (4) 62.0%<-5.1pt>

数量関係 100 人のうち 40%が女子のとき、女子の人数と求める式を書く (9) 56.6%<+8.7pt>

- ② B問題の平均正答率は 47.3%で、ゴンドラが上がるときの説明を解釈し、それを下がる時に適用して説明を記述することが全集計を大きく上回った。一方、次のような問題の正答率が、1割台であった。

数と計算 2分音符と付点2分音符の長さの関係を正しく表している図を選び、その図が正しいわけを書く (2) 13.2%<-0.7pt>

図形 長方形の紙を折ってできた四角形が、どのような図形かを書く (3) 13.9%<+1.8pt>

数量関係 1980 年と 1985 年は、どちらの年も輸出した台数が輸出しなかった台数より多いことが分かるわけを書く (4) 10.5%<+1.5pt>

このように、小学校算数では、基本的な平面図形の面積の求め方の理解や、百分率の意味の理解、示された例を基に正しい図を判断してその判断の理由を数学的に表現すること、紙を折る操作を観察してできた図形を筋道立てて考えて数学的に表現すること、比較量の大小判断を割合を基にして数学的に表現することなどに課題が見られる。

(参考：昨年度の課題)

「単位量当たりの意味理解や、数学的な考え方を使って日常事象の問題を解決していくことに課題が見られる。」

＜中学校国語＞

- ① A問題の平均正答率は82.1%で、意味を考えて同音異義語を書くこと、文章の展開に即して内容を捉えることなど、相当数の生徒ができています。一方、次のような問題の正答率が5割台や3割台であった。

話すこと・書くこと	話し合いの方向を捉えた司会としての質問を書く	(7)二 59.8%(<+4.0pt>)
言語事項	漢字を書く(祭りの日程を <u>セントウ</u> する)	(9)一 2 33.4%(<+3.6pt>)

- ② B問題の平均正答率は65.1%で、段落相互の関係を理解し、文章の展開を捉えること、必要な情報を探し、関連させながら読むことなど、相当数の生徒ができています。一方、次のような問題の正答率が全集計を下回ったり、4割台だったりした。

書くこと・読むこと・言語事項	二つの「ピクトグラム」を比べ、どちらを採用するのかを理由とともに三文で書く	(1)三 33.0%(<-4.1pt>)
書くこと・読むこと	本文を読んで分かったことを一つ取り上げ、Q&Aの形式で紹介する	(2)三 44.4%(<+1.1pt>)

このように、中学校国語では、話し合いをする際にその方向を捉えて的確に発言をすること、説明的な文章と図の関連を考えながら書かれている情報を基に自分の考えを論理的に書くこと、説明的な文章を読んで文章の内容を正確に捉え、提示された形式に合わせて適切に書くことなどに課題が見られる。

(参考：昨年度の課題)

「文章を推敲することや、適切な敬語を使うこと、情報を基に根拠を明らかにして、自分の考えが相手に伝わるように書くことに課題が見られる。」

＜中学校数学＞

- ① A問題の平均正答率は61.5%であり、正の数負の数の四則計算、整式の加法、減法、与えられた投影図から空間図形を読み取ること、平行線の錯角に当たる角の大きさを求めること、反比例のグラフをかくことなど、相当数の生徒ができています。一方、次のような問題の正答率が2～3割台であった。

図形	正三角形DACを、点Cを中心として時計回りに回転移動して正三角形BECにぴったり重ねたとき、その角度を求める	(4)(2) 34.0%(<+1.5pt>)
図形	三角形の外角の和が 360° であることの証明について正しい記述を選ぶ	(8) 27.8%(<+0.8pt>)
数量関係	定形外郵便物の料金表から、重量と料金の関係について正しい記述を選ぶ	(9) 32.4%(<+3.5pt>)
数量関係	$V=RI$ を基に、電圧 V が一定のとき、抵抗 R と電流 I の関係について正しい記述を選ぶ	(12) 27.9%(<+0.3pt>)

- ② B問題の平均正答率は53.4%で、グラフから必要な情報を読み取ること、問題場面における考察の対象を明確に捉えることなど、相当数の生徒ができています。一方、次のような問題の正答率が、3割台であった。

図形	2つの三角形が合同になることを証明するための根拠となる事柄を説明する	(3)(2) 36.9%(<-0.4pt>)
数量関係	2人の球速の範囲をそれぞれ求める	(2)(2) 30.5%(<+1.6pt>)
数量関係	ヒストグラムの特徴を基に、時速131kmの球速に的をしぼって練習することが適切でない理由を説明する	(5)(2) 30.5%(<+1.6pt>)

このように、中学校数学では、関数関係についての正しい理解や、図形やグラフなどを基に根拠を挙げて説明することなどに課題が見られる。

(参考：昨年度の課題)

「円の面積に関わる問題を解くことや、手順を踏んで問題を解決すること、文字式を使って説明することに課題が見られる。」

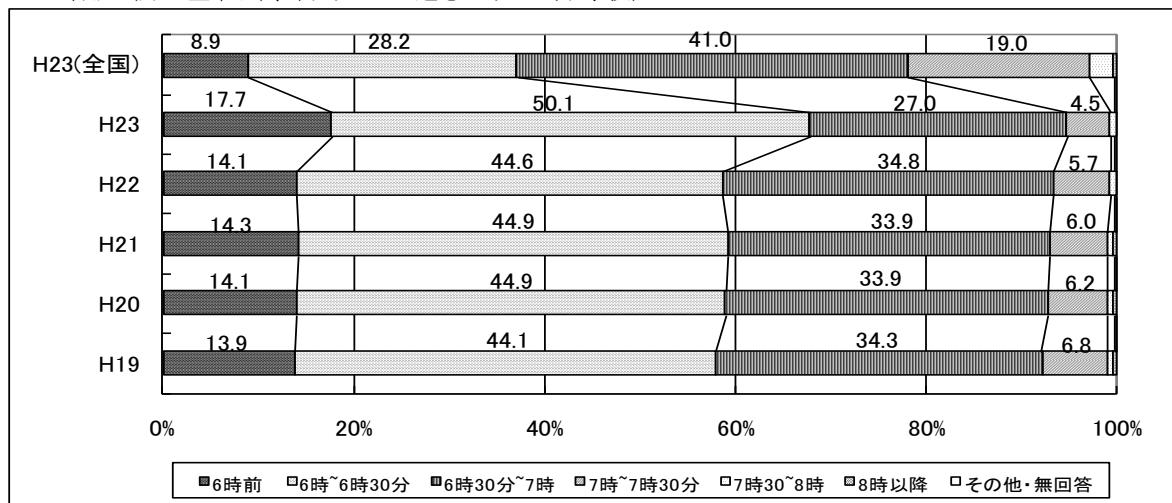
2 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査（＜＞内は全集計との差）

（1）児童生徒に対する調査

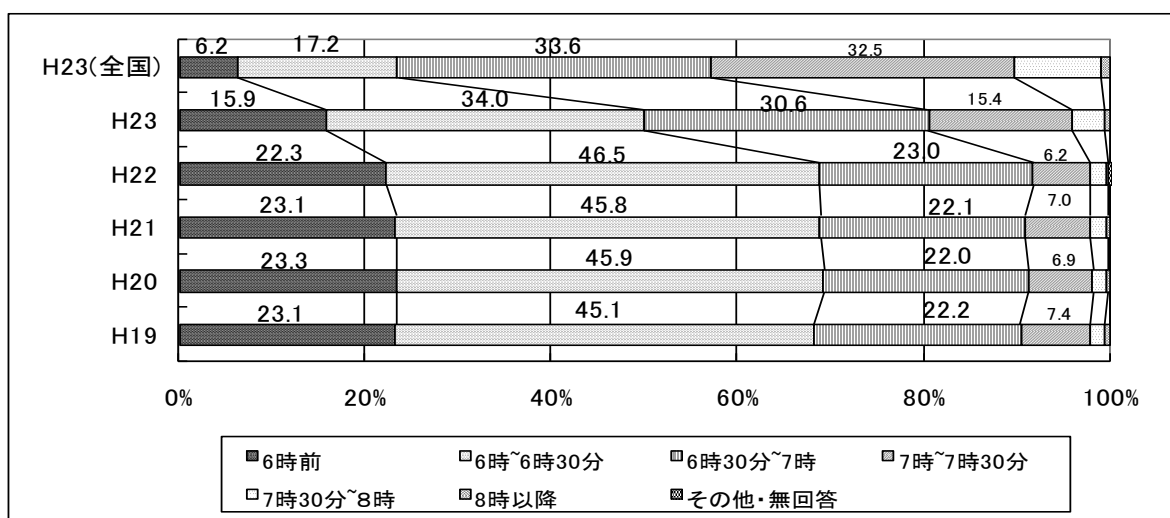
- 早寝早起きなどの「基本的生活習慣」、行事参加などの「地域への関わり」等の項目において、肯定的回答が全集計の割合を上回っている。
- 約9割の児童生徒が、家で学校の宿題をする習慣を身に付けているが、自分で計画を立てて勉強をすることなど、家庭学習の方法や内容について課題が見える。
- 昨年度と比較して、粘り強く問題を解こうとする児童生徒の割合が増えている。

- ① 「6:30 より前に起きる」児童は 67.8%＜+30.7pt＞、生徒は 49.9%＜+26.5pt＞、「10:00 より前に寝る」児童は 59.9%＜+18.9pt＞、「11:00 より前に寝る」生徒は 37.0%＜+11.9pt＞である。昨年度までの傾向と異なる結果となったが、本年度は9月に調査を実施したため、運動会の練習や部活動引退などの影響があったことが考えられる。

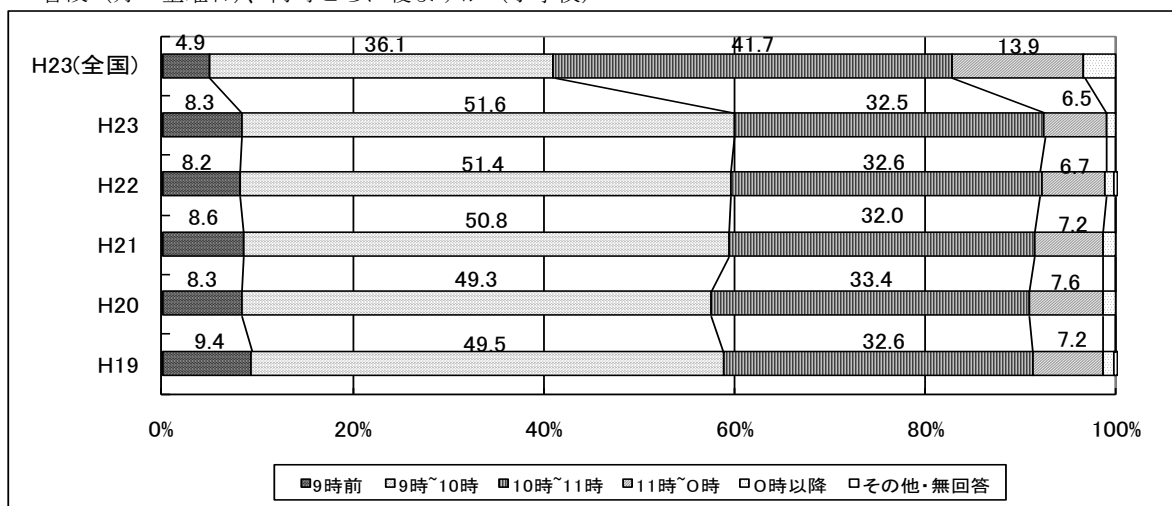
普段（月～金曜日）、何時ごろに起きますか（小学校）



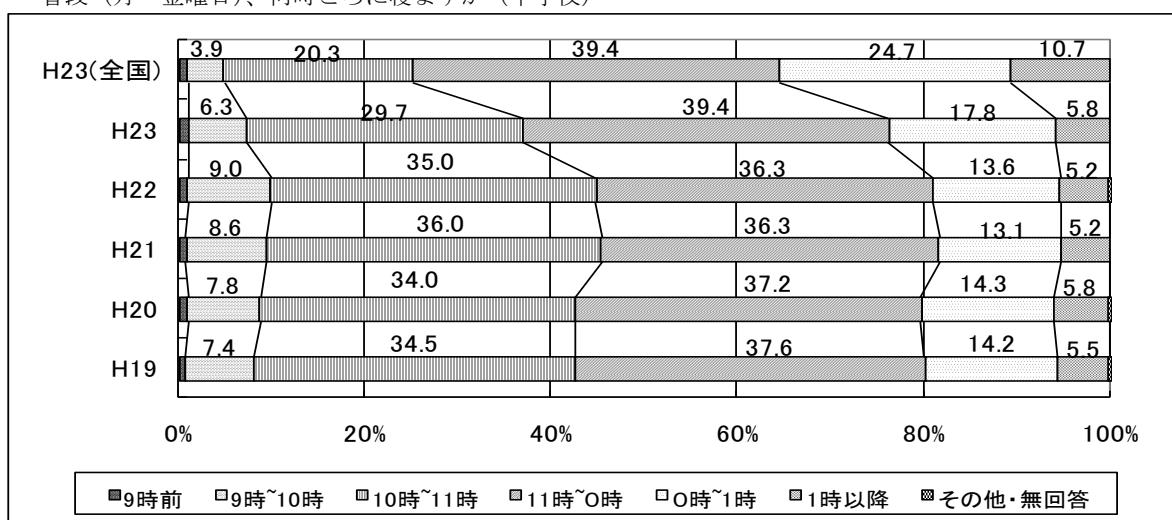
普段（月～金曜日）、何時ごろに起きますか（中学校）



普段（月～金曜日）、何時ごろに寝ますか（小学校）

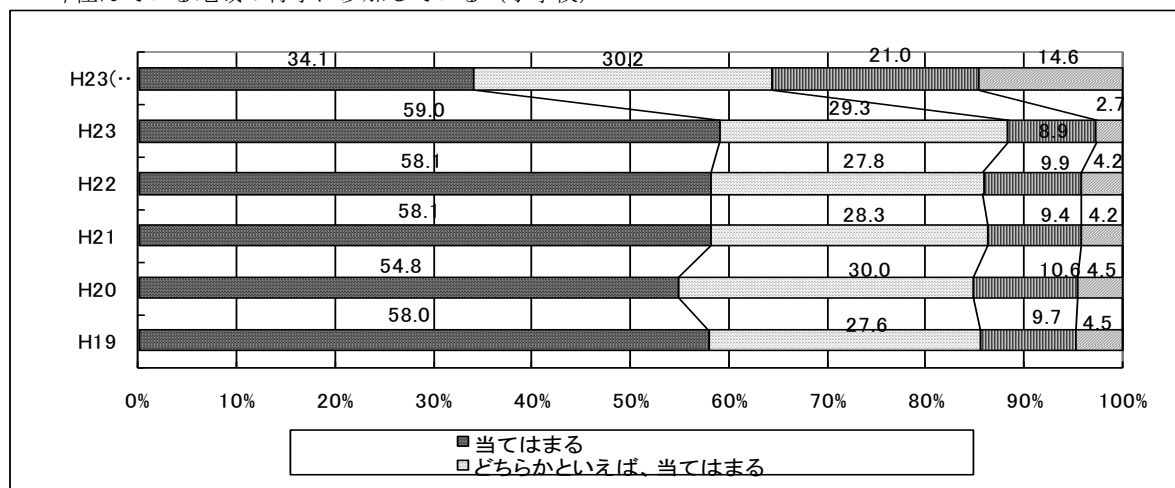


普段（月～金曜日）、何時ごろに寝ますか（中学校）

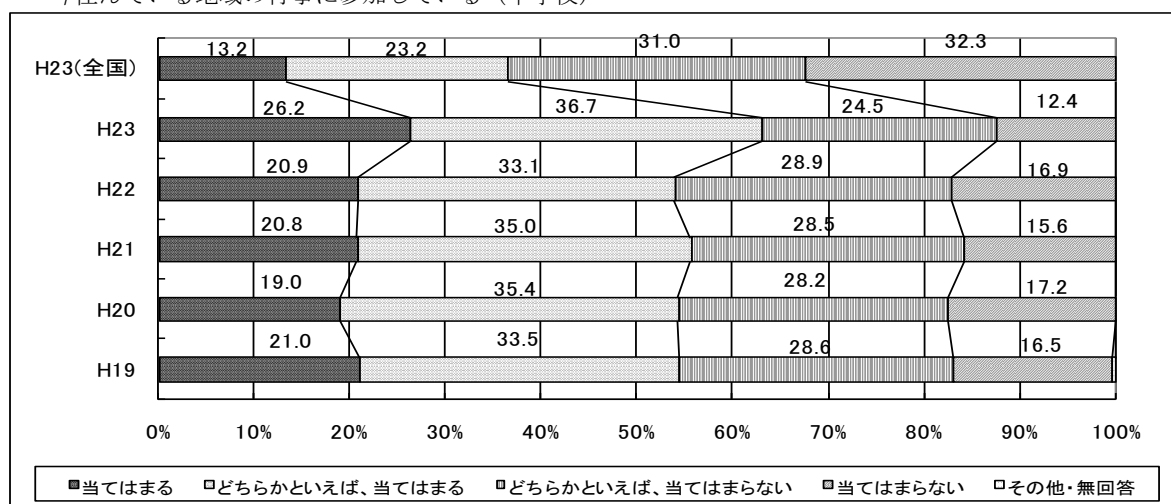


- ② 「今住んでいる地域の行事に参加している」児童は 88.3%<+24.0pt>(昨年度 85.9%)、生徒は 62.9%<+26.5pt>(昨年度 54.0%)である。全集計と比較して、地域の行事に参加する児童生徒の割合が極めて高い。

今住んでいる地域の行事に参加している（小学校）

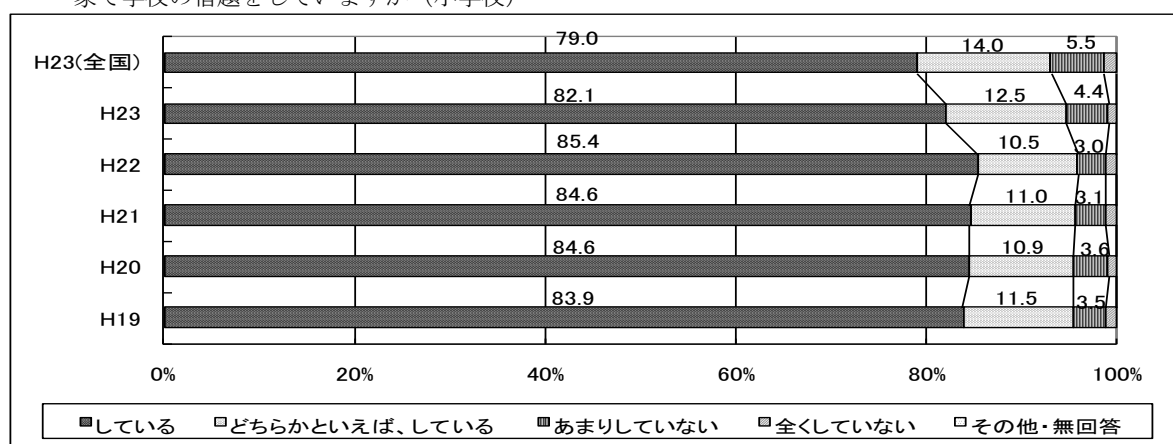


今住んでいる地域の行事に参加している（中学校）

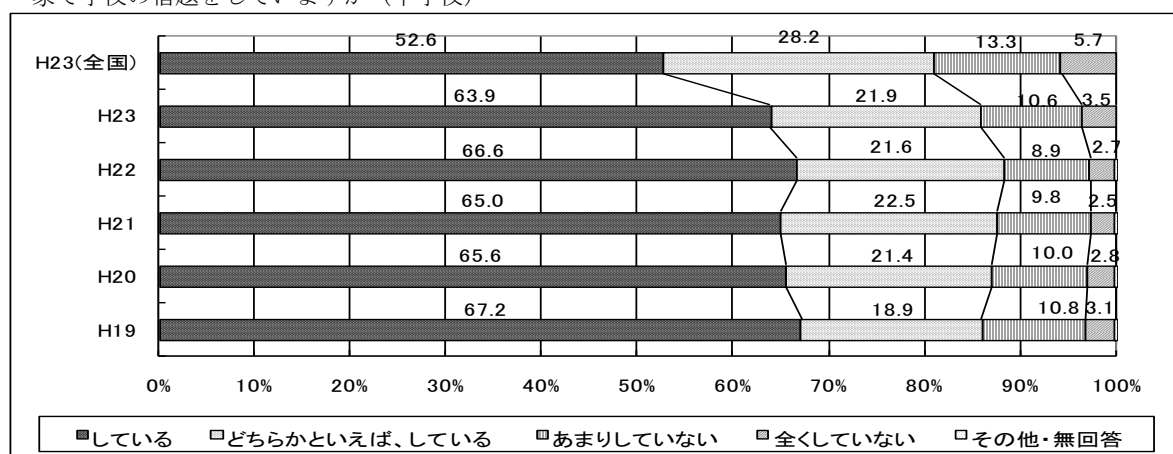


- ③ 「家で学校の宿題をしている」児童は 94.6% $\langle +1.6\text{pt} \rangle$ （昨年度 95.9%）、生徒は 85.8% $\langle +5.0\text{pt} \rangle$ （昨年度 88.2%）であるが、「家で自分で計画を立てて勉強をしている」児童は 48.8% $\langle -3.8\text{pt} \rangle$ （昨年度 56.0%）、生徒は 45.9% $\langle +1.2\text{pt} \rangle$ （昨年度 39.6%）であった。「自分で計画を立てて…」は、中学校では昨年度と比較して肯定的回答の割合が増えているが、その要因の一つとして調査実施時期が9月であることの影響が考えられる。今後も、学校の授業を基盤として、児童生徒が計画的に学習に取り組んでいける習慣形成を一層図っていく必要がある。

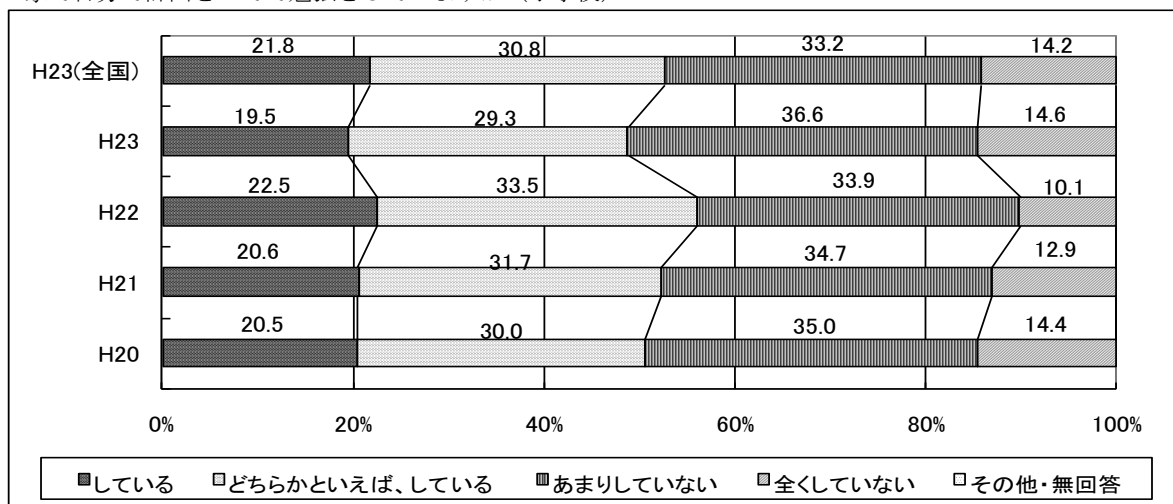
家で学校の宿題をしていますか（小学校）



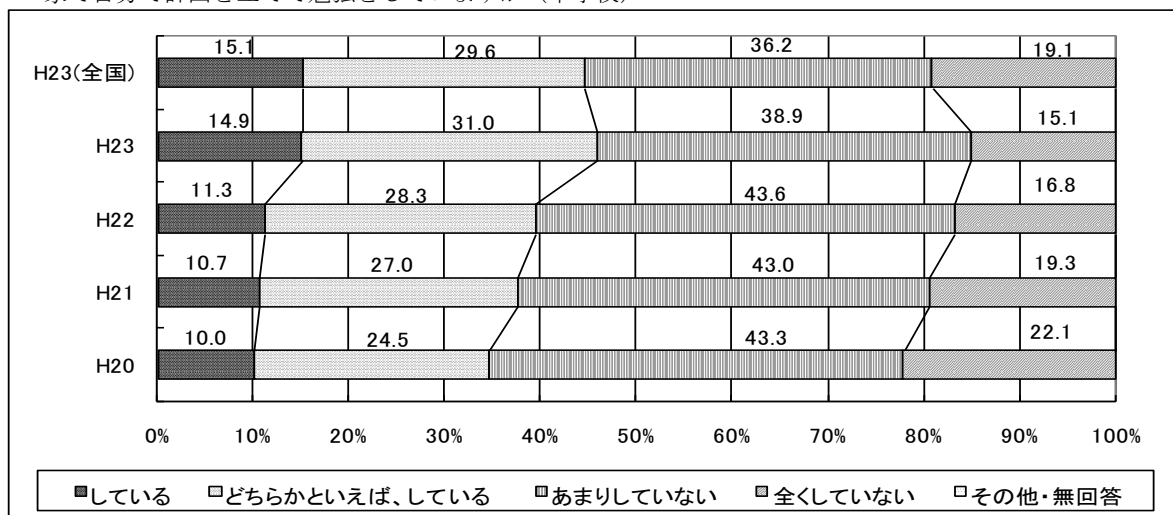
家で学校の宿題をしていますか（中学校）



家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（小学校）

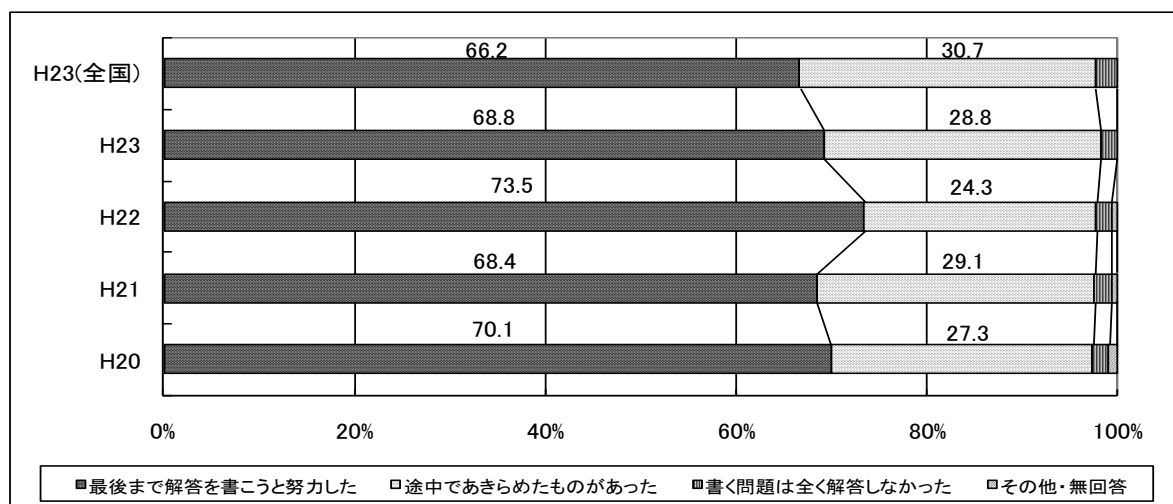


家で自分で計画を立てて勉強をしていますか（中学校）

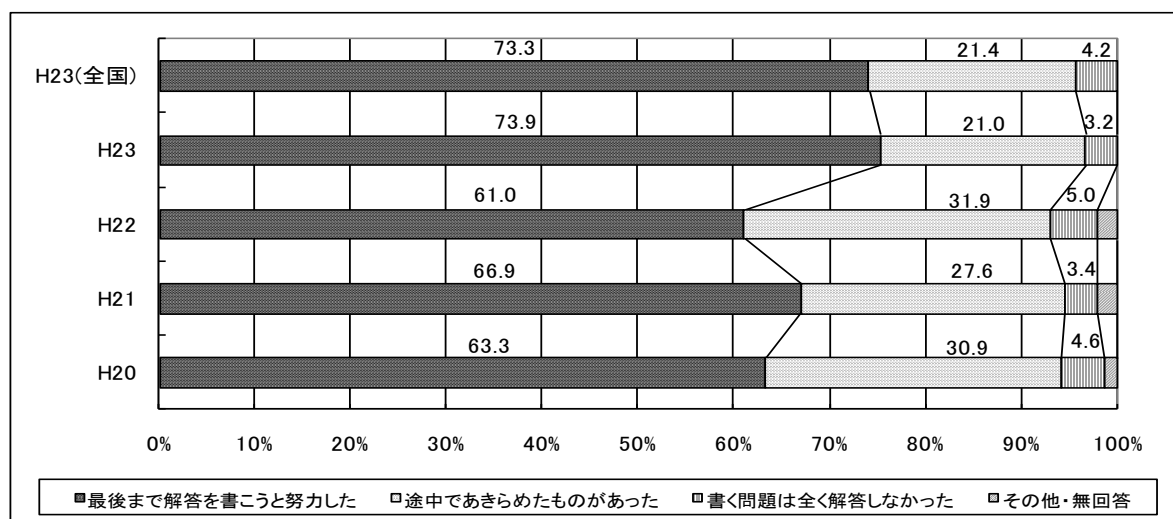


- ④ 「（国語）解答を文章で書く問題について、最後まで解答を書こうと努力した」児童は 68.8%(<+2.6pt>)(昨年度 73.5%)、生徒は 73.9%(<+0.6>)(昨年度 61.0%)であった。昨年度と比較してその割合が小学校では減り、中学校では増えた。

（国語）解答を文章で書く問題について、最後まで解答を書こうと努力しましたか（小学校）

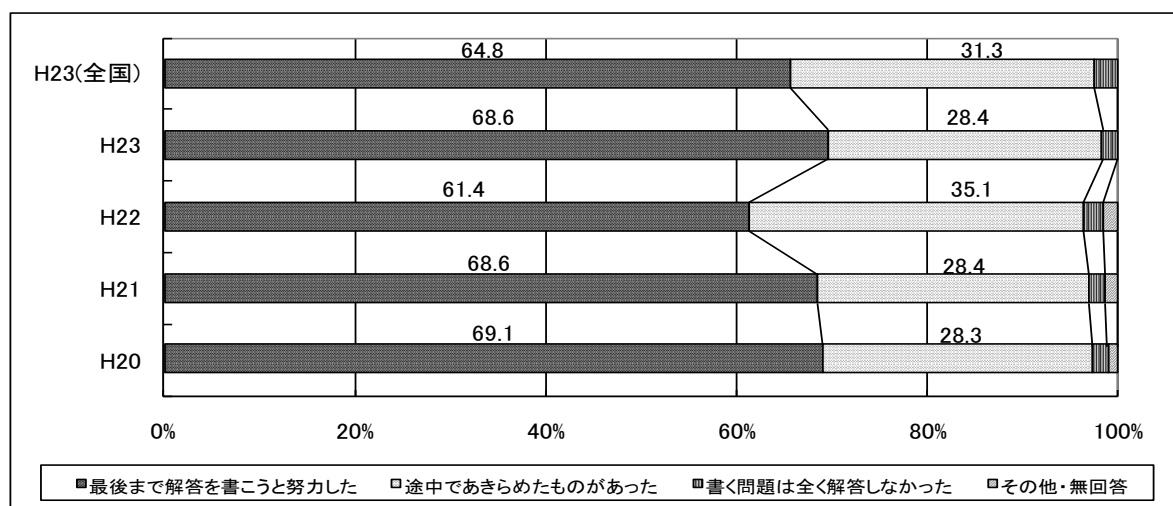


(国語)解答を文章で書く問題について、最後まで解答を書こうと努力しましたか(中学校)

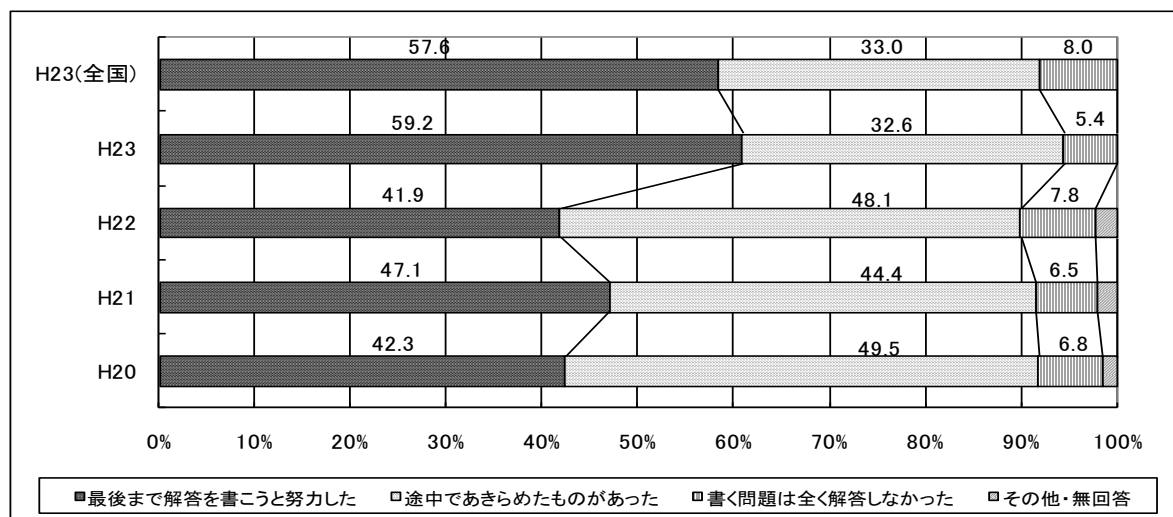


- ⑤ 「(算数)言葉や式を使って、わけや求め方を書く問題について、最後まで解答を書こうと努力した」児童は 68.6% $\langle +3.8\text{pt} \rangle$ (昨年度 61.4%)、生徒は 59.2% $\langle +1.6\text{pt} \rangle$ (昨年度 41.9%)であった。昨年度と比較してその割合が小学校、中学校ともに増えた。

(算数)言葉や式を使って、わけや求め方を書く問題について、どのように解答しましたか(小学校)



(数学)言葉や式を使って、わけや求め方を書く問題について、どのように解答しましたか(中学校)

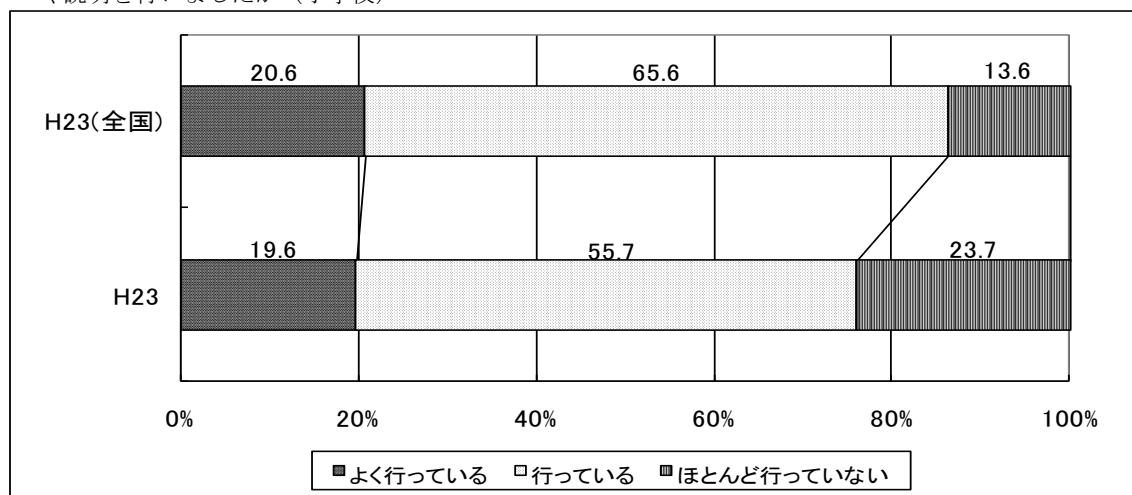


(2) 学校に対する調査

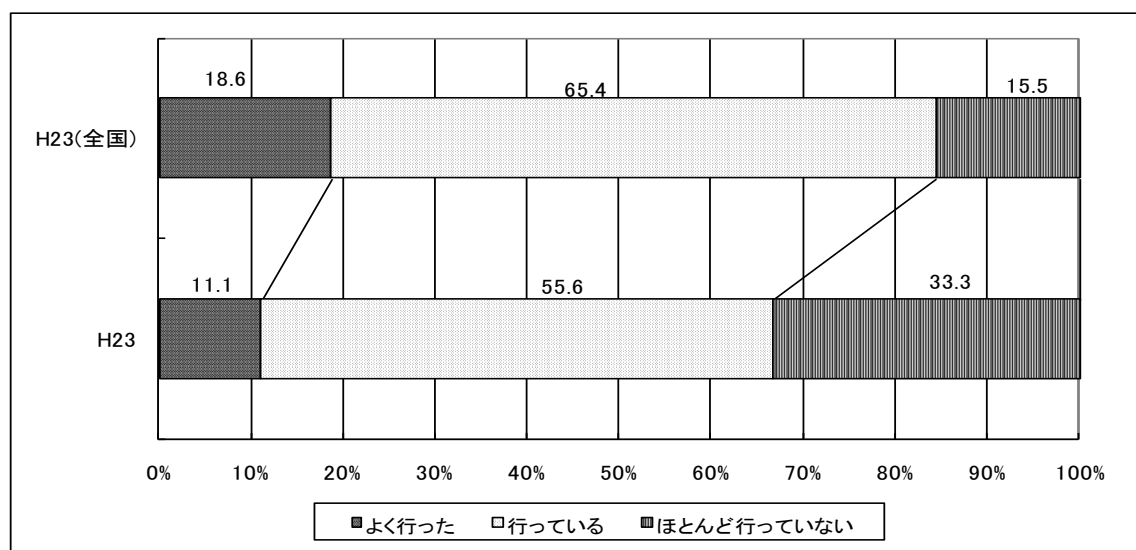
- 自校の平成 22 年度調査結果を分析し、具体的な教育指導の改善に活用したりして、日々の授業改善に生かしているものの、その結果を保護者や地域に説明している割合が 7 割台に留まっている。
- 学習方法（適切にノートをとる、テストの間違いを振り返って学習するなど）に関する指導のように、各校の取組の努力により、昨年度の状況から改善されている項目も見られるが、家庭学習における家庭との連携や与え方について課題が見える。

- ① 「平成 22 年度全国学力・学習状況調査の結果を分析し、具体的な教育指導の改善に活用した」小学校は 90.7%<-6.9pt>（昨年度 93.2%）、中学校は 93.4%<-2.8pt>（昨年度 98.0%）であり、高い割合であった。しかし、「結果について保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行った」小学校は 75.3%<-10.9pt>（昨年度 74.5%）、中学校は 66.7%<-17.3pt>（昨年度 78.4%）である。学校自己評価に位置付けて、保護者や地域に対する説明責任を一層果たしていく必要がある。

平成 22 年度調査や地方公共団体における独自の調査等の結果について、保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行いましたか（小学校）



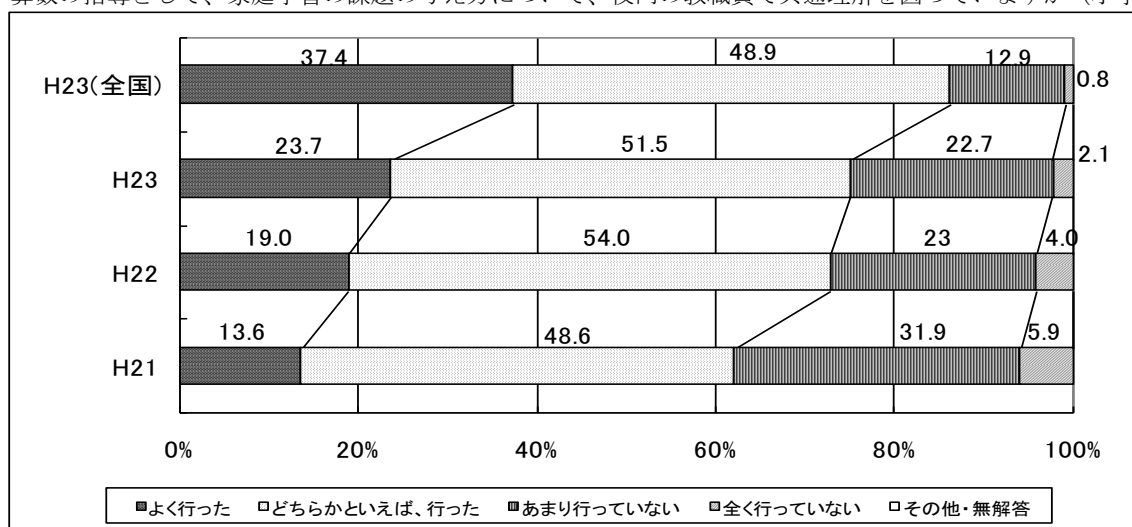
平成 22 年度調査や地方公共団体における独自の調査等の結果について、保護者や地域の人たちに対して公表や説明を行いましたか（中学校）



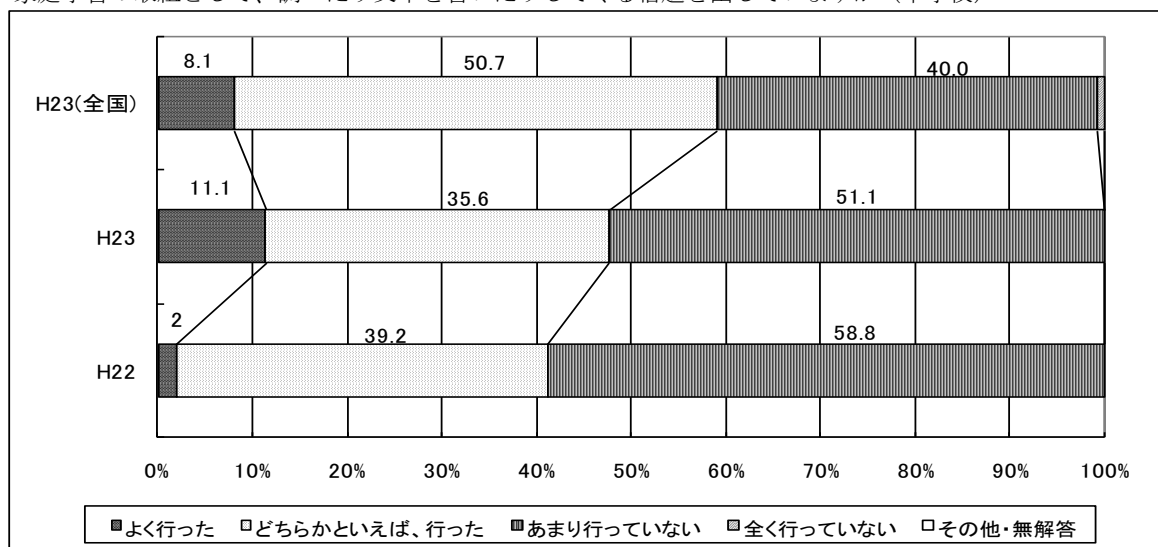
- ② 「学習方法（適切にノートをとる、テストの間違いを振り返って学習する）に関する指導をしている」小学校は 97.9%<+0.1pt>（昨年度 97.2%）、中学校は 97.8%<+1.1pt>（昨年度 100%）、「学校の教育目標やその達成に向けた方策について、全教職員の間で共有し、取組に当たっている」小学校は 98.9%<+0.8pt>（昨年度 100%）、中学校は 100%<+3.8pt>（昨年度 100%）である。

一方、「算数の指導として、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図っている」小学校は 75.2%<-11.1pt>（昨年度 73.0%）、「家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりしてくる宿題を出している」中学校は 46.7%<-12.1pt>（昨年度 41.2%）であり、昨年度よりも若干割合が高まったが、さらに学校と家庭・地域が連携して教育指導の改善を図っていく必要がある。

算数の指導として、家庭学習の課題の与え方について、校内の教職員で共通理解を図っていますか（小学校）



家庭学習の取組として、調べたり文章を書いたりしてくる宿題を出していますか（中学校）



Ⅲ 平成23年度学力向上推進プログラム構築事業との関連

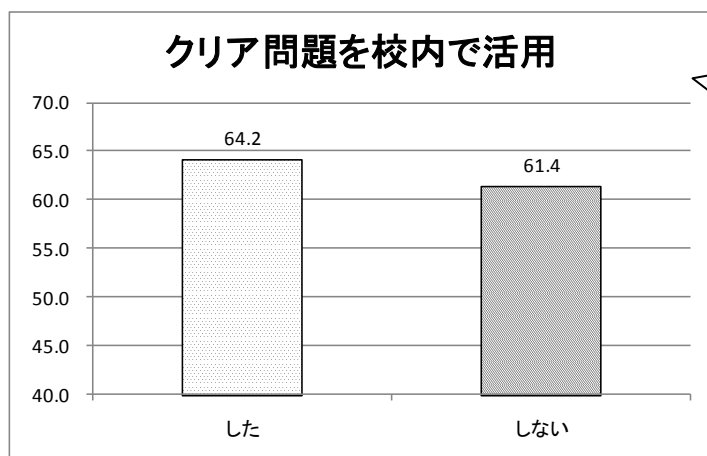
1 クリア・チャレンジ問題との関連

○アクセス数の状況（11月末までの総アクセス数：9373件）

月	4	5	6	7	8	9	10	11
アクセス数	326	678	1077	1420	835	965	1162	1067

○参加校（中学校）の活用状況と正答率の相関

数学Aの正答率との相関

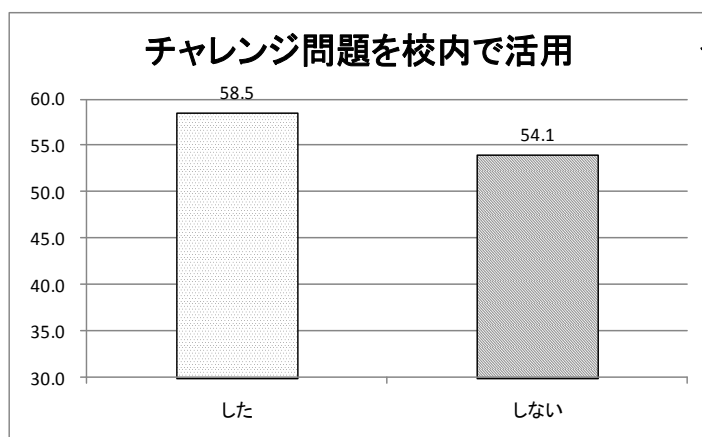


校内での活用例

- ・ドリル学習の時間に活用
- ・授業の導入で活用
- ・単元の節目に活用
- ・補充学習に活用
- ・学習内容の復習に活用

数学Aでは、クリア問題をダウンロードして、ドリル学習や授業の導入、単元の節目や補充学習、学習内容の復習などに活用している学校の正答率が、それらをしていない学校の正答率を上回っている。

数学Bの正答率との相関



校内での活用例

- ・生徒の進度(習熟)に合わせて活用
- ・授業(教材研究)へ反映
- ・単元の節目に活用
- ・補充学習に活用
- ・学習内容の復習に活用

数学Bでは、チャレンジ問題をダウンロードして、生徒の進度(習熟)に合わせた活用や、授業(教材研究)への反映、単元の節目に活用、補充学習や学習内容の復習などに活用をしている学校の正答率が、それらをしていない学校の正答率を上回っている。

これらのことから、クリア・チャレンジ問題の活用が、学力向上の成果に関係していることがうかがえる。

2 PDCA事業との関連

○C調査参加校

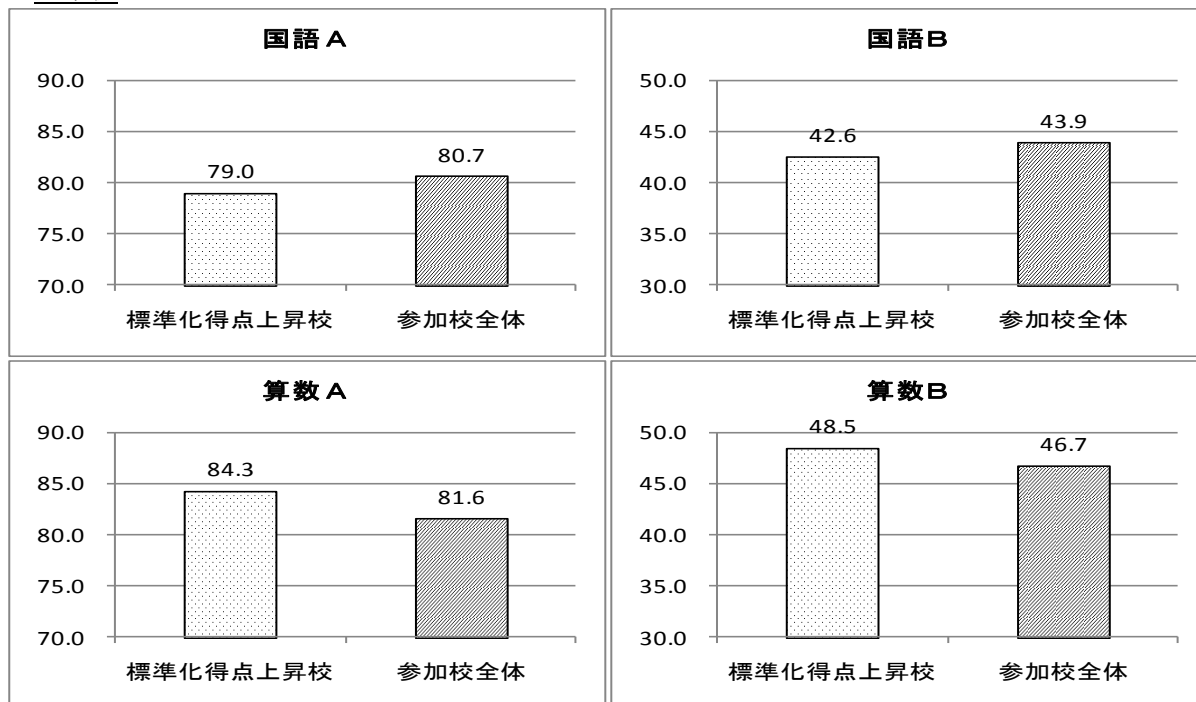
小学校	295 校 (77.2%)
中学校	141 校 (75.4%)

○学力向上担当ミーティング参加校

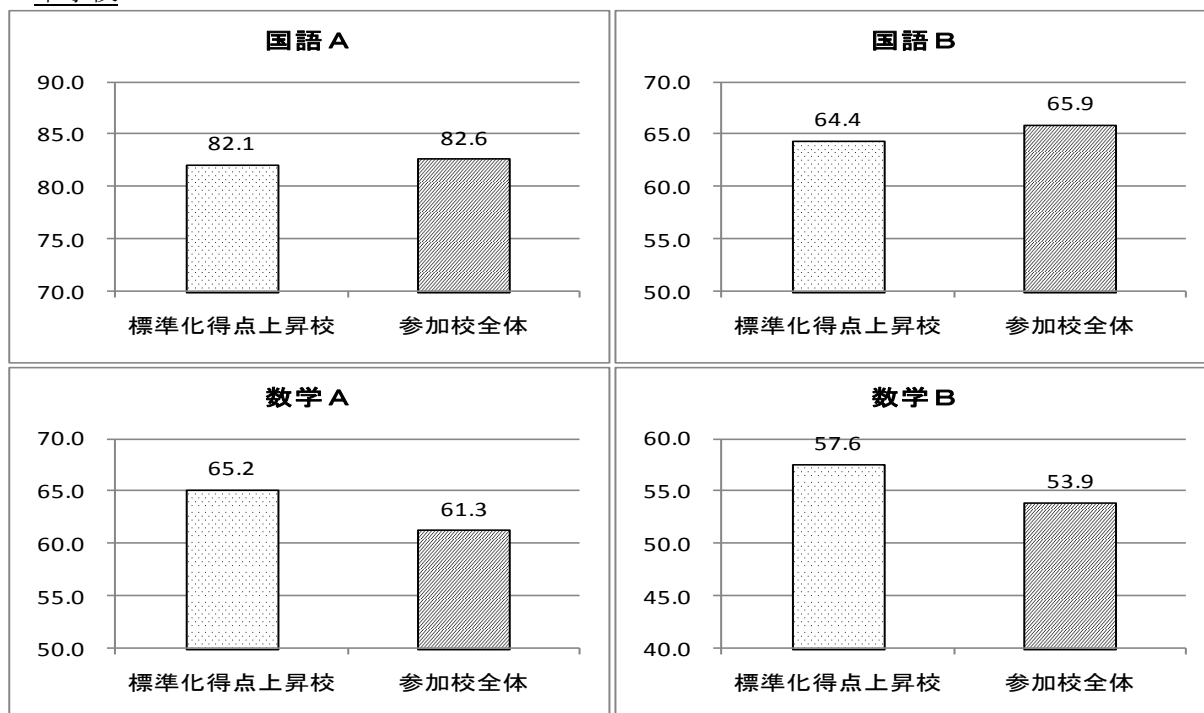
小学校	260 校 (68.1%)
中学校	128 校 (68.4%)

参加校のP調査とC調査における標準化得点（県平均を100としたときのその学校の得点）の差（C－P）がある程度上昇した学校と参加校全体の正答率の相関

小学校



中学校



小学校、中学校ともに算数A、B、数学A、Bにおいて、PDCA事業でP調査からC調査にかけて標準化得点が増加した学校の正答率が参加校全体の正答率を若干上回っている。客観的なデータに基づく指導改善に取り組んでいる学校の成果がうかがえる。

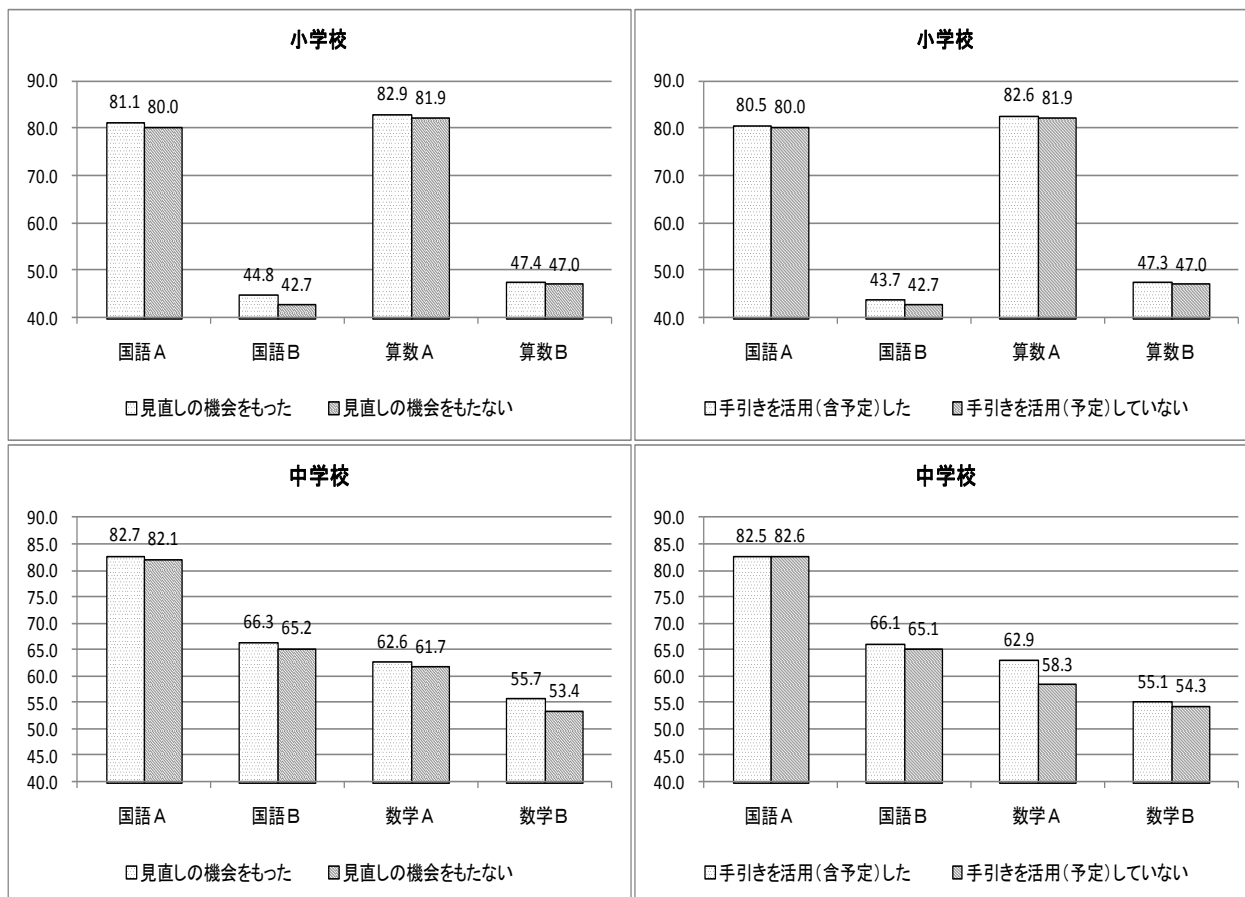
3 家庭学習の充実研修との関連

○家庭学習の充実研修参加校数：小中合わせて 391 校 (68.7%)

○「家庭学習の見直し」「手引き活用」を実施した学校数(全県)

	家庭学習の見直し	手引き活用
小学校	193 校 (50.5%)	42 校 (11.0%)
中学校	109 校 (58.3%)	36 校 (19.3%)

○それぞれの項目を実施したことで正答率の関係



家庭学習についての見直しの機会をもったり、家庭学習の手引きを活用（予定）したりする学校の正答率が、それらをしていない学校の正答率を若干上回っている。

本年度1学期に家庭学習の充実研修を実施したが、それを受けて独自の取組をした学校の成果がうかがえる。

4 3 観点の質的向上

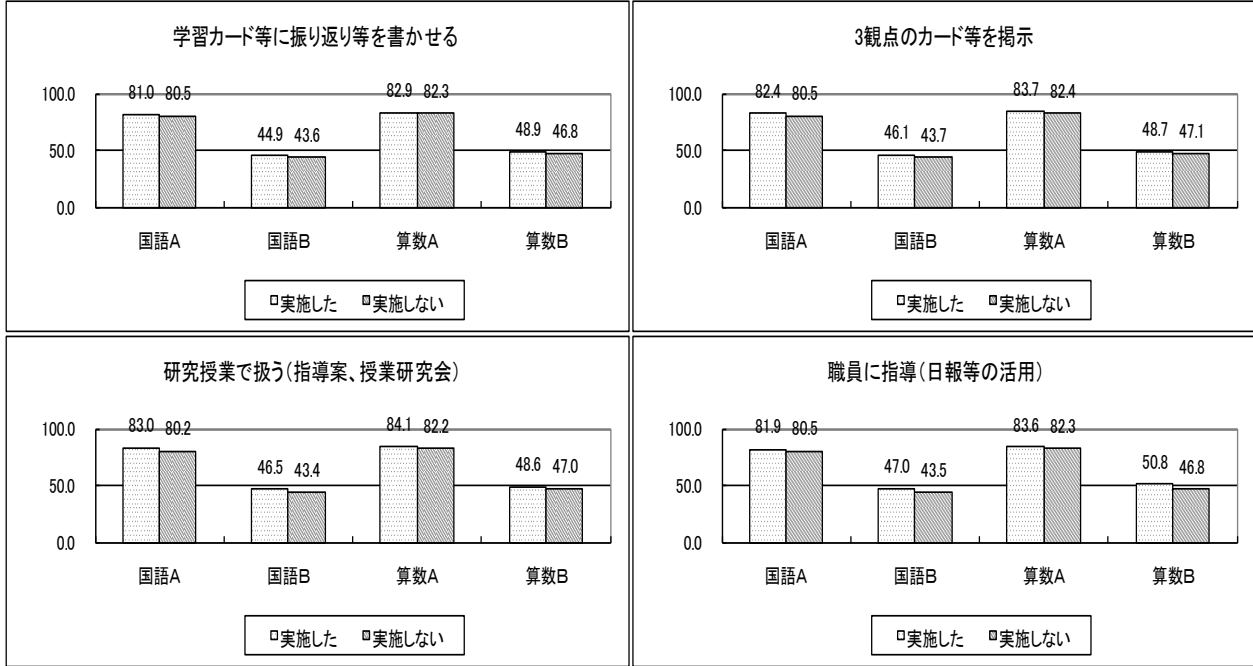
○項目別実施校数(全県)

小学校	学習カード等に振り返り等を書かせる	3 観点カード提示	研究授業で扱う	職員に指導(日報等の活用)
	40 校 (10.5%)	15 校 (3.9%)	26 校 (6.8%)	23 校 (6.0%)

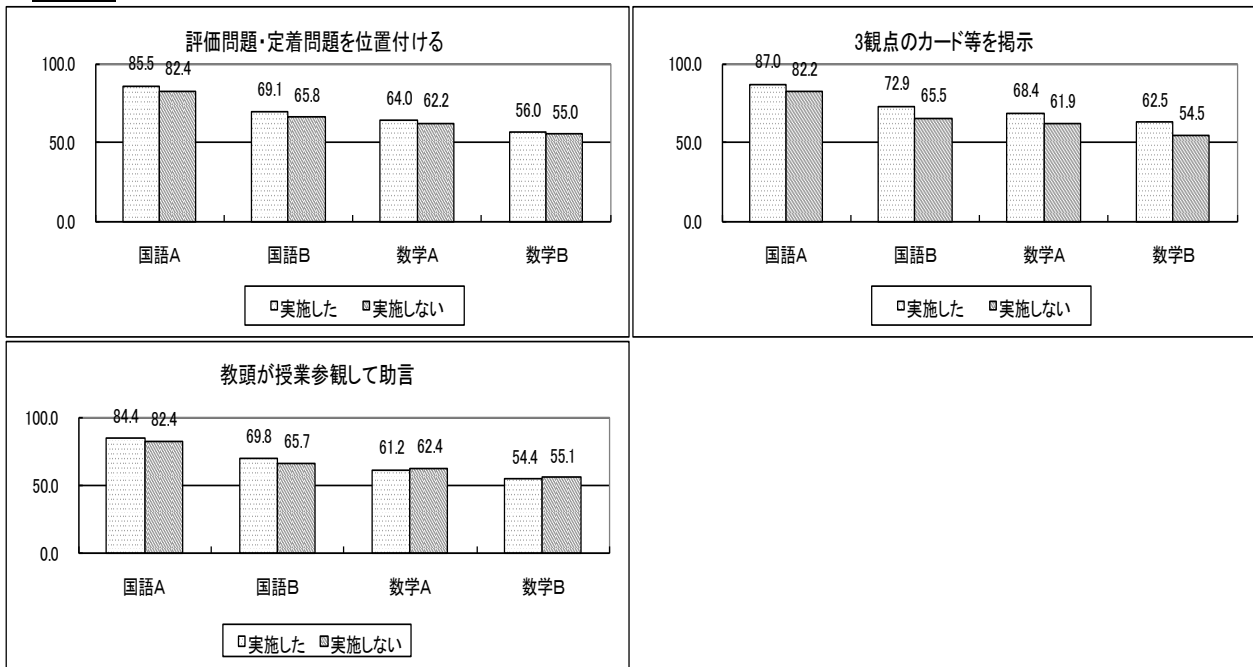
中学校	評価問題・定着問題を位置付ける	3 観点カード提示	教頭が授業参観して助言
	9 校 (4.8%)	13 校 (7.0%)	12 校 (6.4%)

○「3 観点の質的向上に関する項目」の実施と正答率の関係

小学校



中学校



「学習カード等に振り返り等を書かせる」「評価問題、定着問題を位置づける」「3 観点カード等を掲示」「教頭が授業参観をして助言をする」などの取組をしている学校の正答率が、していない学校の正答率と比較して若干高い傾向が見られる。3 観点の質的向上の取組を進めている学校の成果がうかがえる。

IV 調査結果からわかること

1 児童生徒の学びの実態から

- (1) 全集計と比較して小学校、中学校ともに各調査の正答率が上回っていることや、多くの設問で正答率が8割前後であったことなどから、各校の客観的なデータに基づく学力向上の取組の成果が少しずつ表れていることがうかがえる。
- (2) 粘り強く追究することについては、昨年度と比較して中学校において成果が見られた。また、昨年度課題であった「自分で計画を立てて勉強をする」などの家庭学習の充実については、各校で工夫をしているところであり、今後も継続した取組をしていきたい。

2 県の施策の検証から

- (1) クリア・チャレンジ問題を活用した学校の正答率が、活用していない学校の正答率を上回るなど、参加校におけるクリア・チャレンジ問題の活用が学力向上の成果につながっていることがうかがえる。
- (2) 小学校、中学校ともに算数A、B、数学A、Bにおいて、PDCA事業でP調査からC調査にかけて標準化得点が上昇した学校の正答率が参加校全体の正答率を若干上回った。客観的なデータに基づく指導改善に取り組んでいる学校の成果がうかがえる。一方、国語については同様の成果が見られず、その要因を明らかにして施策の改善をしていきたい。
- (3) 家庭学習についての見直しの機会をもったり、家庭学習の手引きを活用したりする学校の正答率が、それらをしない学校の正答率を若干上回っていた。本年度1学期に家庭学習の充実研修を実施したが、それを受けて独自の取組をした学校の成果がうかがえる。
- (4) 「学習カード等に振り返り等を書かせる」「評価問題・定着問題を位置づける」「3観点カード等を掲示」「研究授業で3観点について扱う」「日報等を使って職員指導する」など、3観点の質的向上の取組を実施している学校の成果がうかがえる。

V 今後の対応

- 1 県教育委員会は、本調査結果をさらに分析・考察し、県としての授業改善、学習習慣形成等の重点を端的にまとめた「全国学力・学習状況調査の結果分析・改善の方向」を作成し、1月下旬に各学校や市町村教育委員会へ電子メールにより配信する。
- 2 学力調査の結果から見えた成果、課題に対する具体的な取組内容を保護者や地域に積極的に説明したり、保護者のサポートを働きかけたりすることや、補充学習を充実させることなどについて、全集計と比較して肯定的回答の割合が低かった。今後、保護者や地域と連携したり、学校体制を整えたりして、子どもの学力向上に向けた取組を一層進めていく必要がある。
- 3 本年度、PDCA事業と全国学力・学習状況調査を柱とした客観的なデータに基づく指導改善を、市町村教育委員会や校長会等、関係機関と連携し、県下全小中学校に普及するなど、学力向上についての総合的な対策を具体的に検討し、実施している。今後もこの方向で着実に学力向上の取組を進めていく。